



説教要旨「神への畏れと信仰と」

使徒言行録4章32～5章11節

キリスト教の神は愛の神です。その独り子を世に下されたほどに、わたしたちを愛しておられます。罪深く、無力な私の事さえも目にとめて下さる神です。しかし、そのことは同時にとても恐ろしい事でもあります。神様が私のことをいつも見ておられるのです。わたしたちのやましい思いをもすべてご存じであり、その神を欺くことなどできないからです。わたしたちは、このことに心からの「畏れ」を抱いて日々を生活しているでしょうか。これみよがしの奉仕、見せかけの敬虔さ、神ではなく人間を意識した祈り、そこには神への畏れが欠けています。

人を騙して自分を高めようとしたアナニアとサフィラの行いは、スケールは小さくとも、もっと巧妙な形で、自分でも気づかない仕方で、実はわたしたちの内に起きていることではないでしょうか。わたしたちの日々の歩みは、神への「畏れ」に貫かれたものとなっているのでしょうか。神への「畏れ」の欠如、それこそがアナニアとサフィラの問題であり、罪だったのだといえます。ペトロにその罪を指摘されたアナニアとサフィラは息絶えました。彼らはおそらく、軽い気持ちで嘘をついたのでしょう。しかし、ペトロにそれが神を欺こうとしたことなのだと指摘され、息絶えました。

「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、その罪はいつまでも残る。」(ヨハネ 20:23)

アナニアとサフィラは、自分たちが犯してしまった罪のあまりの大きさに、もはや自分のことを赦すことが出来なかったのでしょうか。

何も死ななくても…自らの罪を見つめてまた、やり直せば良いではないかと思えます。しかし同時に、自分はこのアナニアとサフィラほどに、神を畏れているだろうかと考えさせられるのです。「これぐらい大丈夫。気にしなくていい。」そう自分に言い聞かせている時、神の目を軽んじてはいないでしょうか。

わたしの様な者にも目をとめてくださるといふ、神への感謝と喜びは、醜い心の内までも、すべてを知り尽くす神への畏れと表裏一体の事柄なのです。